The Danube Quarterly

ドナウ通信

No.63

2005(平成17)年・春季号

ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin

April						
S	M	T	W	T	F	S
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

May						
S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

June						
S	M	T	W	T	F	S
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

目次

挨　拶　日本人学校の開校にあたって　野田　昌利　1

着任挨拶　ブダペストに新しい教育の芽を　三代　喜政　2

補習校の閉校にあたって

掌中の思い出　加茂　博行　3

補習校の思い出　矢吹拓夢・沼田尚子

塘　健介・前田亜美

新補習校紹介　新補習校の開設にあたって　鷲尾　亜子　7

随　想　休日の朝マルギット　竹内　勝則　12

創　作　二人桂馬　岩井　孝博　14

映画時評　*Sorstalanság* の映画化に寄せて　盛田　常夫　18

日本人会からのお知らせ　酒井　由美子　22

日本人学校開校にあたって

日本人学校運営理事会
前理事長　野田　昌利

本年四月よりブダペスト日本人学校が開校されましたこと誠におめでとうございます。

本校開設にあたり、大使閣下並びに大使館、補習校、商工会、日本人会、及び当地に在住の皆様方の昼夜を厭わぬご奉仕とご苦労をいただいことを、この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

二〇〇三年に全日制の日本人学校設立準備委員会が設けられ、僅か二年弱で開校の運びとなりました。私は、昨年四月より一年間運営理事会理事長を務めさせて頂きました。この間の活動を振り返りますと、昨年五月に、文科省宛てに日本人学校設立の要望書提出、七月に、ブダペスト一二区と日本人学校との（Viranyos 小学校別館）賃貸借契約の仮調印、及び校舎改築工事開始と順調に進み、九月には改築が完了して補習校が移転いたしました。最終的に、一二月にブダペスト一二区と正式に契約と相成り、月末には文科省より開校許可がおりました。今年に入ってからはいよいよ生徒の募集も始まり、派遣職員及び現地採用の教員も決定し、四月開校に向けて準備が整いました。

日本人子女の為の学校は、これから進出しようとする日系企業にとり不可欠な要素です。その為にも子女の教育を安心して任せられる場ができたことは大変喜ばしい事だと思います。

また、ブダペスト日本人学校は、現地の小学校の別館を賃借するという他国とは違った形態をとっており、子供たちを通してますます日本とハンガリーの交流の輪を広げ、深められるものと期待します。

これから、運営理事会の役割が重要となってまいりますが、学校経営は私企業ですので受益者負担で経営することが原則となってきます。安定した生徒数の確保は、教育施設の充実、教員確保、父兄の皆様の経済的負担の軽減に繋がります。是非皆様のお力添えでますます発展させて頂きたいと思います。

日本では四月開校に際しては、春耕秋収という古の言葉が使われます。桜は、タネ桜と呼ばれ仕込みを始める時期を教えてくれます。ハンガリーでは、アーモンドの木々が代わりに花を咲かせてくれます。異国の地において、日本人学校が実り多き教育と生活の場を子供たちに与えることが出来るよう願って止みません。

ブダペストに新しい教育の芽を

ブダペスト日本人学校
校長　三代　喜政

三月十二日午後六時、私と家族はブダペストのフェリヘジ空港に降り立ちました。外はみぞれ混じりの雨が降り、まだ冬の装いでした。加茂先生、大使館の海野さん、小山さんの出迎えを受け、ほっと気持ちが和らぎました。ホテルまでの車中、曇った窓を手で拭くと外にはほのかな橋の明かりが目に入りました。「あれがくさり橋です」という声を耳にし、「ここはもうブダペストなんだ」という気持ちと「これからいよいよ大変な仕事が始まるぞ」という緊張感に包まれました。しかし、ブダペストの街の灯りは優しく温かく、何か懐かしさを感じさせてくれるように出迎えてくれました。

そして四月十七日、新設ブダペスト日本人学校が新たな歴史の第一歩を踏み出します。本校の設立に際し、多くの在留邦人の方々、大使館をはじめ関係諸機関のご苦労は想像に余るものと、深く敬意を表したいと存じます。

そのような中、本校校長としての責務は大きく、皆様方の期待に違わぬものとしなければならないと、心引き締まる思いで赴任いたしました。

ところで、私のブダペスト日本人学校における教育ビジョンについて少しお話したいと思います。

学校教育は、子どもたちの夢を育み、その夢を実現するための道を創造していく作業ではないかと考えます。そこで、本校に通ってくる子どもたちが、自らの将来をどのように夢見、どのような教育を学校に期待するのかを的確に把握し、それらに応える教育をしていかなければならないと考えます。

今、日本では「特色ある学校づくり」ということが言われております。私たちはブダペスト日本人学校を「特色ある日本人学校」としてどのような取り組みをしていくかも、大きな課題になると考えます。まず、保護者の本校教育に対するニーズに迅速に対応できる柔軟な姿勢をもつこと。また、隣接するビィラーニョス校との交流を通し子どもたちの現地理解教育への足がかりとすること。そして、現地社会に「開かれた学校」として認知されること等の取り組みを構想しています。

ブダペスト日本人学校は、今、産声をあげ新しい命を授かりました。私たち教職員は一丸となり、この学校を健康で元気のある学校に育てていく所存です。しかし、我々の力は微々たるものです。保護者の皆様方はもちろん、在留邦人の皆様、関係諸機関の皆様、ハンガリーの国民の皆様、等々のお力添えをいただき世界に発信できるブダペスト日本人学校の教育を育てていきたいと思っています。

どうぞ、皆様これから温かくまた厳しくご指導、ご支援をお願い申し上げ挨拶とさせていただきます。

補習校の閉校にあたって

掌中の思い出

加茂　博行

子どもの時の記憶というのは、手のひらで砂をすくうようなものだ。ほとんどの記憶は指の間からもれ落ちてしまい、砂の海の中の一粒となってしまう。記憶として残るのは、友達と遊んだ楽しい思い出や、子どもなりに真剣に悩んだり壁を乗り越えたりしたものばかりである。

私自身、小学校低学年の思い出などはほとんど無い。成人式のときに友人たちが小学校の時の思い出を楽しげに話しているのを見て、自分の記憶の糸をたどるのに大変苦労した。小学一、二年生の記憶は担任の先生が年配の女性で、何かいいことをすると、何度も頭をなでてくれたことや、二年生のときから熱心に書道を教えてくれたことぐらいである。

そう思うと急に心配になった。果たして、補習校の子どもたちはここで過ごした日々を覚えていてくれるのだろうか。それとも、砂の海の中の一粒となってしまうのであろうか。

そんな思いを抱きながら、閉校式の日を迎えた。子どもたちはいつもと変わらぬ元気な表情で登校してくる。代表の子どもたちが、補習校への感謝の言葉を述べた。それを聞きながら、改めて子どもたちにとって補習校という存在がいかに大きなものであったかを感じた。

外国の地で学校に通うということは、大人が思う以上に大変なことだと思う。日本であれば当たり前のように交わされる言葉の一つひとつがうまくできないというのは、もどかしいものであろう。補習校に通う生徒が何気なく話した言葉で、私の胸に深く刻まれたものがある。

「外国で住んだという苦労がいつか役に立つなんて、大人だけの言い分ですよ。いきなり外国に連れてこられて、お前が通う学校はここだなんていわれても、納得できないって」。成長するにつれて、思いは変わるにしても、子どもたちの正直な感想なのだろう。

そんな子どもたちの複雑な感情を支えてきたのが補習校なのだと思う。年齢や国籍の違う子どもたちが共に学び、共に笑い、見事に支えあっていた。多くの子どもたちが自分の精神的な支えとなってくれたと話していた。

思うに補習校は、現地校で荒波にもまれた子どもたちが、ふと立ち寄る防波堤のような存在だったのだと思う。子どもたちを波から守りすぎるのは良くないことだと思うが、いきなりの大波に耐えられない子らを見守る場もまた必要である。

子どもたちの手のひらから補習校

の思い出が漏れ落ちることは決してないだろう。子どもたちの手のひらに包まれて、長い間補習校の思い出は大切に守られ光を放ち続けるに違いない。

三月三十一日。補習校最後の日の夜に、ふと校舎を眺めた。星空をバックに、私の目に映った補習校はいつもより威厳があるように感じた。大事な友人がいなくなるような寂しさを感じた。

ほ習校の思い出

小学部　三年　矢吹　拓夢

ぼくのほ習校の思い出は、友だちがたく山できたことです。ぼくが初めてハンガリーに来て一年生になったとき、ぼくは友だちを作れるかなぁと思いました。でも、友だちがすぐできました。時々けんかをしたけれど、友だちに笑わされたり、友だちを笑わせたり、ほ習校の日が楽しかったです。でもずーっとは、続きませんでした。友だちが日本に帰ったりして別れてしまいました。でも、友だちが帰るたび、また新しい友だちを作ってのくり返しでした。本当に楽しいほ習校でした。

ぼくも三月二十四日に日本に帰ります。でも、ぼくは、一生ぼくの友だちの事は忘れません。

日本人ほ習校、色々な思い出をありがとう。

補習校の思い出

小学部　三年　沼田尚子

私は、日本人学校ができても、補習校のことを、わすれることができません。なぜならば、こんなにたくさんの友達がいて、こんなにたくさんの楽しさが、つまっているからです。

友達と笑いながら、遊んだ休み時間、つかれてもあきらめずに走った運動会、みんなでわいわいさわいだ合宿、たくさん歩き、走って遊んだ遠足、ドキドキしたテスト、出し物を見せ合い、おいしいものを食べることができた文化祭など、楽しいことが、ほんとうにたくさんありました。

そんなことを考えていたら、いやだったことが、どんどん消えていくような気がします。

おこったり、泣いたり、笑ったり、

感動したり、おどろいたり、いろいろなことが、補習校にすべてつまっているような気がします。

今日で補習校はなくなります。でも、みんなの心のなかに補習校は、いつまでも残っていると、私は思います。

ありがとう…

中学部　一年　塘　健介

僕たちにとって、補習校はかけがえの無い場所でした。

ハンガリーに来た日本人の多くは昼間、アメリカンなどのインターナショナルスクールに通っています。来たばかりのころは、当然ながら言葉は通じません。言葉が通じず、友達も少ない環境に何時間もいるというのは、身も心も疲れるばかりか、少し寂しくなります。そんな時には、日本のことを考えて寂しさを紛らわしたり、ここに来たことを後悔したりもしました。

そんな精神的に不安定な時期に補習校というのは、話せる友達がいて、先生の話していることが一応は理解できて、そして言いたいことの言える心の支えとなる場所でした。夏になると補習校で友達とサッカーをしたり、ソフトボールをしたり、テニスをしたりしました。最初の頃アメリカンではどうしてもシャイになってしまって、友人と共に遊んだりするのは難しかったのですが、補習校では友達と気楽に話しながら、時には喧嘩をしながら心ゆくまで遊ぶことができました。

でも月日が経つに連れて、アメリカンに慣れてくると、補習校の存在が僕にとって面倒なものへと変化していきました。宿題の多い日やプロジェクトがある日に補習校があると、とても疲れて嫌だなぁと思った人も多いと思います。補習校の漢字テスト又は他の科目のテストがある日にアメリカンスクールでもテストがある場合、遅くまで勉強するので寝不足になります。寝不足でアメリカンスクールを通うととても疲れ、又その後直ぐに補習校に行くとさらに疲れます。さらにアメリカンで部活をしている生徒は練習やら試合やらで補習校を休まなければならないので補習を受けなければなりません。疲れが溜まるにつれ補習校が面倒に思えてきます。

でも、もともとそのように感じられるのも補習校があったからこそです。もしも補習校が無かったら、そんな余裕を感じる前に、精神的に追い詰められていたと思います。補習校が支えになってくれたからこそ、今の僕たちがあるのだと思います。

補習校今まで本当にありがとうございました…。

閉校に寄せて

高等部　二年　前田　亜美

二九年前このハンガリーという土地に一つの学校が設立された。それがこの補習校であった。二九年間という歳月のなかでこの補習校はたくさんの出会いや別れを見守ってきた。そして、今度は補習校が見送られる番だ。私は、その二九年間の中の一番最後の年に来たので補習校の歴史などは全くと言っていいほどわからないが、私がいた一年間でもいろんな事があった。と言うことは、二九年間という長い月日の間には数え切れないほどの思い出が詰まっていることだろう。そんな異国の地ハンガリーで、生徒達が補習校で学んできた。

補習校の大切さとは何だろうか？私が感じたことは、周りにいる人の暖かさ、お互い共感できる友達がいること。ここはアメリカンスクールみたいに全く違った価値観を持った人が少なく、似たような価値観を持った人がいるので多くのこと、特にアメリカンスクールでは共感できないことが共感できた。それは、言葉の壁が無いからだろうか？言葉の壁が無いから、その分英語では伝えづらいことが日本語では伝えられるのではないか。

では、私にとっての今までの補習校とはいったい何であったか？私は、父の仕事の関係で小さい頃から色々な国をまわっている。補習校に通い始めたのは私がイタリアに住んでいた頃、中一の二学期からだった。まだ英語を習い始めたばかりの頃は何で他の人のようにスラスラとしゃべれないのか、どうして私が言いたいことがわかってくれないのか、と自分に腹が立っていた。日本語では簡単に伝えることができるのに、口に出てこないはがゆい気持ちでいっぱいだった。そんな時、補習校はわたしを励ましてくれた。今では、たくさん苦労をしてきたのでそういうことはほとんどないが、やっぱり日本語のように上手くはいかない。この補習校では、そう言う苦労をしてきた友達がいる。アメリカンスクールの友達には分かってもらえないような苦労をわかってもらえる。

もう、今日でこの補習校は無くなってしまう。これからはもうみんなとは毎週水曜日の四時から八時までは補習校では会えない。しかし、まだアメリカンスクールでは会えるのでこれからもどうぞよろしくお願いします。日本に帰られるみなさんも、新しい日本人学校に移られるみなさんも、そのまま同じ学校に残られるみなさんも、これからはもっとたくさん苦労をすると思いますが、がんばってください。私も私なりにのんびりとがんばっていきます。

新補習校紹介

新補習校の開設にあたって

設立準備委員会委員長
鷲尾　亜子

日本では新年度の到来を告げるものは、桜と決まっているが、ハンガリーには、「黄金の雨」という美しい名の潅木がある。小さな黄色い花はまさに「黄金の雨」のようであり、これが街のあちらこちらで見かけられるようになると、今年も春になったと心が逸る。この四月二日、「ブダペスト日本人新補習校」（仮称）が開校し、十八名の児童を迎える頃、きっとその「黄金の雨」が咲き出しているはずである。

新補習校の目的

まず「新補習校」の概要を紹介したい。設立の経緯については後で詳述するが、この「新補習校」は、これまであった準全日制のブダペスト日本人補習校が三月末に閉校されることになったため、主に国語の補習の場を引き続き希望する保護者の有志により設立された学校である。

初年度にあたる二〇〇五年度の授業は、週に一度、土曜日の午前中三時間である。年間では合計三十九回になる。週一回の授業では限界がつきものではあるが、日本の初等教育の内容の一部を補習させることを通じ、ハンガリーに居住する日本国籍の子どもたちに、日本人としての誇りが持てるよう文化、そして言語・教養に親しませるようにする。また将来、ハンガリー・日本の二国関係の促進に貢献できる人材の育成を目指す。

教科は当面は国語のみとした。（ただし、今後、保護者からの希望があれば教科を増やしたり特別講習等を設けたりすることもありうる）。指導には、国語を正確に理解し表現する能力を育てるとともに、思考力や創造力および言語感覚を養い、国語に対する関心を深め尊重する態度をはぐくむことを目標とした。実際の授業では、この目標に沿って、「話す」「聞く」「読む」「書く」をバランスよく指導することとなる。また集団でこそ可能になる意見交換にも力を入れ、お互いを思いやりながらも刺激しあえる場を作ることを目指す。

新補習校教室

教室は、トゥルクベース小学校（ブダペスト市二区、Törökvész út）を借りることとなった。「新補習校設立準備委員会」（以下準備委員会）の話し合いの過程では、市内五区の日本人会事務所も候補となり、また伊藤会長には無料での利用を基本的にご承諾いただいていたものの、やはり勉強する場としては、仮に有料であっ

ても学習用の机や椅子、黒板等の環境が整っている普通小学校の方が適切ということで意見が一致したためである。また、教室が最低三つは必要になりそうであったことも影響した。

同小学校の校長先生には、「新補習校」設立の趣旨をご理解いただき、ご厚意で本来の料金の半分で教室を貸していただけることになった。また、休み時間の体育館や校庭の使用についても快諾してくださった。

対象児童

「新補習校」の対象者は、原則として、満六歳以上で現地学校、または国際学校に通う日本国籍を有する児童・生徒である。しかし、前補習校に通学していたハンガリー人児童が勉強の機会を奪われないよう、ハンガリー人児童も含めた。ただし、この場合は、「既に日本語の能力があり、日本語で授業を受けることが出来る」という条件を明確にした。

二月に生徒募集説明会を行った結果、初年度は合計十八名の児童から入学申し込みがあった。その内訳は、小学校一年生七名、三年生五名、四年生四名、六年二名であり、中学部の申し込みはなかった。全日制日本人学校が設立されたため、駐在員子弟は少なく、大半は両親が国際結婚、または現地に長期滞在する日本人である。中には国境近くのスロバキアから通学する児童もおり、こうした子どもに勉強の機会を提供できることは大変喜ばしいことである。ハンガリー人児童は、すべて日本での滞在経験があり、中には兄弟の会話はいまだに日本語、という児童もいる。

新補習校教員

教員は昨年末から公募し、面接を通して三名の方々を採用させていただいた。先生方は皆、教育経験を持っているのは当然のこと、日本語の美しさ、また日本人として国語を勉強する大切さを深く理解していらっしゃる方々である。「新補習校」に通学する児童は、平日は普通の学校で勉強しているためにかなり負荷がかかることが予想されるが、これらの先生方は、そうしたこともよく理解した上で、いかに楽しく学校で教えていくかも真剣に考えてくださっている。一人の親として「この先生ならば自分の子どもをお願いしたい」という先生ばかりである。

なお、四年生と六年生に限っては「複式学級」となる。むろん理想は一学年につき一名の教員、という「単式」であるが、児童数が少なく、また公的機関等からの補助が得られていない現状では難しい。ただし、今後必要があれば、保護者を教員の補助としてつけることや、教員数を増加することも検討されるであろう。

これまでの経緯

前補習校の閉校、そして全日制日本人学校の設立が正式に決定したのは一昨年のことである。この決定を受け、昨年一月に「補習校のこれからの展望についての検討会」が全日制学校設立準備委員会、補習校運営委員会により開催された。そこで両委員会からは、全日制学校設立準備で手一杯であること、そして、補習校の存続を求める保護者のニーズが多様であることなどを理由に、具体的提案は提示されなかった。両委員会からは、閉校後も補習の場を希望する場合は、保護者で集まって自主的に新たな教育の場を設立していただきたい、ということに終始し、ボールはその場に集まった保護者に投げられた格好となった。「検討会」では、様々な意見、質問等が出されたが、新たな委員会の設立でまとまることはなく、両委員会が出席者への「ニーズ調査」のアンケートを後日実施し、結果を出席者に配布することのみが決定され終った。

こうした流れについて、全日制に移行しない児童生徒の保護者、また、現在は就学年齢に達していないものの将来補習校への通学を希望していた保護者からは戸惑いや反発があったことは記しておく必要があるだろう。そもそも、全日制の必要性についての背景は別にしても、補習校閉校・全日制開校には圧倒的な支持があったわけではなかったので、当然と言えば当然であろう。また、一時「ドナウ通信」でも全日制と平行する形で補習校の存続が検討されており、保護者をミスリードしたことは否めないだろう（これについて、昨年一月の「検討会」では誤りであったと認めている）。

しかし、補習校閉校の決定が覆されることがなく、補習の機会が失われてしまう恐れがあるのであれば、批判しているだけでは始まらない。そこで、国際結婚組や長期滞在者を中心に、話し合いが何度か持たれ、その結果、昨年十月に前述の「検討会」に出席された方々を中心に、設立準備委員会の呼びかけが行われた。公募の結果、七名からなる「準備委員会」が同月末に立ち上がった。

準備委員会の仕事は、学校運営の枠組みの決定、教員や教室の選定、児童生徒の募集等であったが、完璧ではなくでも、可能な限り理想に近い形で四月に開校させることであった。なお、学校運営の大前提は非営利であり、委員の仕事もすべて無報酬で、通信費、交通費、コピー代等の経費も個人負担であった。

ここで、学校の名称について若干触れたい。「新補習校」としたのは、単なる語学サークルではなく、あくまでも学校という勉強の場を追求することが目標であるからである。一方で、「補習校」という名は、文部科学技術省が認定している学校に使用

するものでもある（認定には年間最低授業日等、様々な要件がある）。認定されていない学校が、「補習校」という名称を使用することを禁ずる規定はないものの、これまでの経緯を十分把握していない方々には、前補習校と同様のものができるのではないか、と誤解を受ける恐れがあるというご意見もいただいた。しかし、準備委員会で話し合った結果、既に「新補習校」という名の下で教員の公募などを実施したため、途中での混乱を避ける意味からもこのまま「仮称」として継続使用することとした。今後は、後述する「運営委員会」を中心に、保護者や関係者の意見も踏まえ、仮称を正式な名称とするか、また別の名称を採択するか検討されることになる。また将来的に文部省認定の「補習校」を目指すか、目指すとすれば今後、必要要件を満たすための目標達成の日程などについて話し合われることになるだろう。

「運営委員会」は、四月に保護者を中心に正式に結成される予定で、既にメンバーもほぼ固まっている。当面は当委員会が会計管理も含め、学校のすべての運営を行う。初年度については「校長」を設置していないため、学校の代表者は運営委員会の委員長となる。経営は一切の営利を追求しないこととしている。

一方、昨年末から適切な法人化についても調査・研究を続けており、早ければ一学期中にも非営利団体である協会（Egyesület）の申請手続が行える予定である。協会の設立以降は、経営母体は協会、学校の実務の運営は運営委員会となると考えられるが、それぞれの権限や義務、会計処理等についてはさらなる具体的な検討が必要である。

今後の課題

準備委員会の仕事は、四月に「新補習校」を開校することが最優先であったため、今後、次のような課題も残されている。

主要課題の一つは、前述したとおり法人化である。もう一つは教室である。教室の選定にあたっては、前補習校閉校を巡る経緯や、世界的に見ても補習校は全日制と同じ校舎を使用している事例がほとんどであることを踏まえ、全日制日本人学校の校舎をお借りしたい、というのが保護者や関係者の第一希望であった。しかし一方、全日制自体がブダペスト市十二区から校舎を賃貸しており、又貸しについては交渉が煩雑となること、また全日制の方が開校前の準備で手一杯だったこともあり、こちらの交渉に力を注ぎ新補習校の開校が遅れるというリスクをとるよりは、とにかく四月から授業が行えるよう教室を確保する方を優先とした。今後は、運営委員会を中心に事前準備的な交渉が進められるであろうが、「新補習校」の協会が正式に設立さ

れれば、交渉にも弾みがつくものと期待される。

しかし、最も重要な課題は、今後「新補習校」の運営をいかに軌道に乗せ、また児童の学力が適切に伸び、児童が楽しく通えるような学校づくりではないだろうか。準備委員会は学校の枠組を作ったのであり、例えてみれば飛行機と滑走路を用意したのみである。その飛行機に燃料を適時適切に供給し、定期的な機種点検を行い、どう操縦するかはこれからの教員、運営委員会、保護者、児童しだいである。

物事はすべて誕生してからが大変であるように、これから「新補習校」にも様々なことがあるだろう。そのため、生徒募集説明会や入学説明会などでは、学校任せではなく、保護者からの積極的な協力がなければ学校が成り立たないことを繰り返し説明してきた。一つには、週一回の授業の時間のみ国語を学習するのではなく、家庭も「第二の教室」として子どもの勉強をサポートするようお願いした（心積もりとしては、補習校に対する家庭は、「第一の教室」であっていいくらいかもしれない）。もう一つは、運営にも可能な範囲で積極的に関わっていただくようお願いした。一見大変そうではあるが、実は自分たちの希望する学校を創れることも意味することを強調した。

最後になるが、「新補習校」設立に関しては、在留歴の長い方々を中心とした個人、また団体から寄付をいただいた。「新補習校」の運営原則は、経常経費は児童の保護者が賄う受益者負担であるが、初年度は経費の予測が立てづらいことから、安心して運営が行えるよう寄付をお願いしてきた次第である。こうした寄付が財政的に寄与することはもちろんのこと、「新補習校」設立の趣旨にご賛同いただけたことに、どれだけ心が励まされたことか計り知れない。この場をお借りして、改めて皆様に御礼申し上げたい。

また、「新補習校」の教員研修の際、指導にあたってくださった方々にも御礼申し上げたい。教員にとっては非常に貴重な経験であり、いただいた沢山のアドバイスは、今後実際の授業で活かされることであろう。さらに、準備委員会の仕事を進める中、様々な方々からご意見やアドバイス、また励ましの言葉をいただいた。今後とも暖かい目で見守ってくだされば幸いである。

ハンガリーにはこの四月、全日制日本人学校が開校するが、こうした「新補習校」の設立により、日本人子女にとって当地での学習の選択肢が増えることになれば幸いである。

（三月二十九日記）

＊「新補習校」についてのお問い合わせは、**hunijuu-owner@yahoogroups.jp**までお願いいたします。

随想

休日の朝マルギッド島

竹内　勝則

休日の朝八時。ウォーキングを始める時刻です。

マフラーを首に巻きつけジャンパーを着てアパートを出ます。このところウォーキングのコースは決まってマルギッド島です。ケーキ屋さんを横に見て、「すし誠」を過ぎてヘーブ沿いの道に出ます。

ホテル・アクウィンクムの前を過ぎ、アルパッド橋を渡ってマルギッド島へと歩きます。ここまでで三〇分。

マルギッド島を北から南へ真っ直ぐ歩いてマルギッド橋へ出て、ブダ側の駅まで歩きます。ここまでで一時間一〇分になります。

そこからアパートまで歩くこともありますが、ほとんど一七番のトラムに乗ります。アパートを出て帰るまで一時間半ほどで戻ってきます。

昨年春ブダペストへ来てしばらくの間はあちこちコースを捜して歩いたのですが、秋頃からマルギッド島縦断のコース一本に決めて歩いています。

一月二月は寒さが厳しく、アルパッド橋を歩く頃は耳が凍りそうになり、手はかじかんでしまいます。一月末にはドナウ川に氷が流れるのを見ました。

寒い国なんですよねぇ。それでも休日の朝はウォーキングすることにしています。

私は一七〇センチ、五七キロと痩せている体形なのに、四〇歳過ぎから境界型糖尿病と診断され、毎月ＨｂＡ１Ｃの値をチェックしていました。痩せの大食いの方で昔からたくさん食べていましたが、食べる量を減らさずに運動をしなくなったことが原因と言われ、食事の量を減らすことと体を動かしてカロリーを燃やすことを続けるようになりました。

一病息災にするには、体を動かすことを続けることと思って実行しています。一時はジョギングをしていたのですが、膝を傷めてからはもっぱらウォーキングに専念しています。そんなわけで休日に一時間余り歩いています。

コースをマルギッド島にしたのは、気分が良いからです。

ブダ側を歩くと三人で手を回しても届かない程の大木をたくさん見ます。今は葉が落ちて裸になってしまいましたが、それでも朝日が差し込んで来るとだいだい色の光が木々の間を通り抜けて辺りを明るさで包み込むようです。

そここに残っている雪に当たり

キラキラと輝きます。なかなか良い光景です。

道端に雪が氷となって残っており、一足毎にザクッザクッと音を立てながら、清澄な空気の中を歩くことは精神面にも良いものです。

マルギッド島にはブダ側の道とペスト側の道とがあって、それぞれ趣が異なります。

駐車場を横切ってペスト側のマラソン道を歩くと、ＧＲＡＮＤ　ＨＯＴＥＬが見え、次にローマ時代の遺跡が見えてきます。

しばらく歩くと鳥や鹿のいる小さな動物園があり、昼間は子供連れで賑わいます。

そこを過ぎると林になり、野鳥を観察する人達に会ったりします。林を過ぎるとマルギッド橋が眼に入って来ます。

ウォーキングももう少しと思う瞬間です。

島からマルギット橋を見上げ、トラムの走る姿が眼に入ると、まんが「三丁目の夕日」の光景を見るようで何かなつかしさを覚えます。

ペスト側のマラソン道にはたくさんの人達が、思い思いのペースでジョギングしています。

若いお兄さん・お姉さんは颯爽と走り過ぎ、昔おにいさん・おねえさんだった人達は自分に合わせたペースで走って行きます。

時々昔はプロポーションが良かったんだろうな、と思わせるおばさんがゆっくりしたペースで走る姿に会います。いろいろな人がそれぞれのペースで走っています。

ぜいぜいさせながら走る人、ははあくらいの人、はっはっとテンポのいい人と、いろいろです。

目的も人それぞれなのでしょう。私のように糖尿で走っている人もいるかも知れません。健康の為に走る人、レースで勝つ為に走る人もいるでしょう。

いろいろな目的を持って、それぞれのペースで、自分のベストを引き出そうと走り続けます。

ふと、人生ってそんなことが大事なんだよなぁ、なんて思いました。

創作

二人桂馬

岩井　孝博

えー、わざわざお眼に止めていただき、有難うございます。

「桂馬の高飛び歩の餌食」てナァーことを将棋の世界じゃ言いますが、漢字で言うテェーと粗忽者てェー事になりますか、気が効いていて間が抜けるってェーか、勇み足テーか、ま、なかなか憎めないところがなんとも痛し痒しってなところがあるもんでして。

よォー元気な様子何よりだ。

若い時のご無沙汰ッつーのは、「又、どっかで、バカやってんだろ」とか「何処、ほっつき歩いたんだか」なんて、どっか冗談っぽい響きで心配したりするもんですが、どうもこの年齢になるてぇーと、なんですね、「病気したんじゃネーか」とか「ホームレスになっちまったんじゃねえーか」なんて、あまし、いい方にいかない。しどい時には死んだか、なんて、ね。

まぁー、よくよくかんげーるってーと、そう思って貰いてー、って言うこっちの思いが言ってる気もしますが、年を取るってぇーのは、内の我無舎羅カカァーでも、なんともならんくらいで、こりゃ仕方ネー。

こないだ、久々に帰国して、チョコ坊と待ち合わせていたら、あら、ガムちゃんじゃない、一寸、ガムちゃん、ガムちゃんでしょって、どっかで声がするから、ひょいと振り向くってーと、そこに見たこともねーいいトシマが、ニコニコしてる。

「ま、忘れたの、あ・た・し・・・・チョコ坊よぉー」、なんていわれても、思い出せネー。

首ィーしねってると、「やだー、お医者ごっこしたでしょ」なんていきなりでっかい声で言われ、辺り見ながら、面が真っ赤になっちまった。

長屋の若けーもんが横向いて、クスクスやってんだから、決まり悪リーったらありゃしねー。

でも、よく見るテーと、なんだな、どっか、料理屋の女将さん、って感じで、いい女の匂いが小鼻を突いてくる。あんまし、じろじろ見んのもはばかられるから、ツツーっと寄って行って、「本とかぁーっ、あんな事デッケー声で言われ、思い出さなきゃ、馬鹿だろ俺ぁー」。そしたら「時間かかんのね」だってやがら。

挙句に「あの頃、何人とバカやったんだか」なんて言われ、初手のかっこ悪ィー気が、だんだんと嬉しくなっちまった。それにしても、随分と長げー事、噂にもならなかったじゃねエーか、って言うと、「私、凧

だから、糸離されると、どっかへいちゃう」なんて、訳の判らんこと言うチョコ坊。

で、「最初に離したの、ガムちゃんよ」て言うから、「いつの事だ」って聞くと「中学二年」だったとか。立ち話もなんだからって、ボロ長屋の端っこの家に連れてきたんだが、入るなり「わー、ガムちゃんの家って、寝ながら星が見えんのねー。なにやってんの今」だってやがら。何やってるったって、こっちは物心ついた時から板メーだ。

バカも、アホもつまづきも、野原のかくれんぼじゃネーが、逃げも隠れもやってきた、女に溺れて投げた仕事は数知れない、って言ったら。「今もか」って言うから、「そうだよ」って言ったら、どこで、何で、こんなボロ長屋かって聞いてくるチョコ坊。

日本の匂いが懐かしく、やってはは来たが、行くとこねー、タメダチに頼んで一〇日ばかり借りたんだ。今は東欧ハンガリーだって言ったら、チョコ坊の奴、聞くは語るは、茶も飲まず。

いつの間にか俺も、玉置宏か三波春夫になって喋ってたな。

夏と冬の差が激しく、その間に一寸だけ、春と秋がある。

長雨はないから、いつも乾燥気味で、暑くともさっぱりしてる。木々の緑も、草花も、小鳥も蝶も祖国と変わらない。去年より、少し遅いが、もうすぐに、初雪が来る頃か、氷雨が枯れ木に貼り付いて、見る間に出来る樹氷の季節。

こないだから、ＥＵにはいって、日本人も入国ビザはいらなくなった。しこうきの切符買ってくりゃ、何時でも遊べる。酒代かかるが、ストリップは見放題、もっとも、場所による。その道、安心していい。

食いモンは不味いが、時には旨い物もある。

ワイン、こりゃまったく美味い。

美女はモスクワ、ポーランドと並んでヨーロッパ三指にはいる。冬はドナウの夜景が世界一かって思うほどに美しい。

凍てつく油のような川面の流れに、川岸の灯が映り、ほのかに霧がかかり、ドナウに架かる鎖橋がライトアップされ、寒さで我に返り、温泉で温まる、そんな時誰だっておそらく、悠久の時の流れと、人と生まれた嬉しさを頬に滲ませんだろ。

・・・ナァーんて、俺がうっとり言ってると、「いーいって見たいなぁー、よその国ぃー」とか何とか歌い出しちゃうんだから、いい気なもんだ。

ところでチョコ坊、俺の寝た子を起こしちまってるが、今何やってんだい。

そしたらクリーニング屋のお・か・み・・・だと。
アハ、どーりでこざっぱりして、いー匂いなわけだ。
なーんて、外国生活が長いガム公が、幼馴染のチョコ坊と破れ長屋の一間で、昔話に花をさかせ、チョコ坊が赤くなって、もじもじしてるとこに、いきなり飛び込んできたグミ助ってー野暮が居ます。

「ガム兄ィー、よく眠れたかい」
「ほらきた、ケーマ」
「なんだい、そのケーマッての？」
「アー、何でもいい、エーとこに来た」
「何がでー・・・・？」
「チョコ坊、こいつがケーマ、じゃなくって、タメダチのグミ助」
「よろしくケー、じゃなくってグミ助さん・・・」
「なんだいなんだい、さっきからケーマだケーマだっつーて、二人してポーっとしたりして、えれーとこに来ちまったかな」
「バカッ、余分な事いってんじゃネー。それよか、なんだよ、あの、俺のカバン持って来てくんな」
「何すんだい、もう、けーるのか？」
「ンなこと、言ってやしネーじゃネーか、とにかく要るんだ」
「何を・・・？」
「だから、カバンだよ」
「なんでだい？」
「ンンー、その、なんだ、聞かれたが、忘れっちまったんだよ」
「なにを・・・？」
「うるせー奴だな、電話だよ、電話」
「アレに電話入ってんのか？」
「しつこいな、早く持って来い」
「ははーん、ガム兄ィー、ここに俺がいちゃー、邪魔なんだろ・・・？」
「ハッ飛ばすぞ、このヤロー、番号を知りてんだ、番号を」
「怒るなよ、番号って、電話のかい？」
「そうだ、ったく、しとに恥ィかかせやがって、手間の掛かる奴だよ」
「なんだ、電話番号カイ、で、誰の？」
「誰のって、俺のじゃなエーか」
「なんだい、それなら、三年前ェーから知ってらィ」
「なんだ、その三年前ェーてナァ？」
「聞いてやってくだせエー。御親造さん・・・」
「御親造さんだってやがら、チョコ坊はクリーニング屋の女将さんだよ」
「ハイ、その女将さん・・・・・」
「アラ、ね、ガムちゃん、どうしようあたい」
「あたいって、チョコ坊までなんだ、いったいどうしたんだ、いきなり」
「だって、御親造さんなんていわれちゃ・・・」
「御親造さんが、どうしたい、え」
「御親造さんとなると、ほら、若いツバメかなんか出来ちゃいそうで」
「なーに言ってんだい」

「いいじゃないガムちゃん、あら、グミ助さん一寸ヘンよ、湿っぽくナッチャってるじゃないか」と心配顔で

チョコ坊がレースのハンケチをグミ助に渡すと、グミ助はそれを顔に当てたまま、はァーはァーしながらそっくり返っていく。

ガム公がいきなり、何やってるんだ、こらって、言うテーと、グミ助が、いい匂いだなんていいやがって、話どうしたってどやすと、

「グスン・・・あれァー三年前ェーのこと。おらーこっちで、いじめにいじめられ、いくとこなくなって、ガム兄ィーを頼って、ロンドンに行った。銭も金も、チャリンと音のするもの何もない俺を、後で知った事だが、粋がってあすんでる兄ィは仕事がない。そいでも俺に食わしてくれた。陰で見てたが、兄ィは絵を書いて、広場に行ってそれを売り、その金で俺に食わしてくれた。

十日もした頃だったか、いきなり兄ィが、明日ハンガリーに行くって言うから、俺も行きてェーって言ったら、日本に帰れって、思いっ切り叱られた。

せめて行き先を教えてくれと、ねだって聞いた電話の番号。忘れネーよ。グスン。ついでに覚えてる携帯も・・・」

「そんな古い話し出しやがって、照れくさくってケツがむずむずしてくらァー、このバカヤロッ」

「なにすんのガムちゃん、ブツ事ないじゃない。このしと、桂馬の金成りだよ」

「金なりか、よかったなグミ助、チョコ坊ありがとよ」

「過ぎた昔を洗い流して、惚れ直そうかしら・・・ガムちゃんに・・・」

「さすがクリーニング屋、本とカイ？」

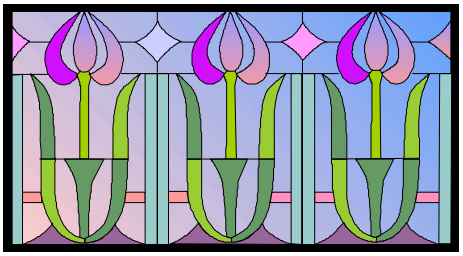
「ガム兄ィ、よせよそれだけは、イギリスの女将さん・・・どうする」

「ギャァー、やっぱりてメーは歩の餌食だ」

「ガム兄ィ、しとの事いえんのカァ」

どうやら、どっちもどっちのようで、又の見届けを・・・。

一服終わって、アラドッコイ。



映画時評

Sorstalanság の映画化に寄せて

盛田　常夫

ノーベル文学賞を受賞した小説 ***Sorstalanság*** の映画化が完成した。撮影技師としてアカデミー賞候補にもなったコルタイ・ライオシュが監督を務め、映画音楽で知られるエニオ・マリツォーネが音楽を担当。二月一〇日からハンガリーの映画館で一斉に封切られた。ノーベル賞受賞作の映画化ということでハンガリー国内の関心は高く、観客動員も記録を更新している。

映画化の難しさ

作家ケルティース・イムレ自身、ノーベル賞受賞前に、映画化のための脚本を出版している（**Kertész Imre, *Sorstalanság-filmforgatókönyv*, Magvető, 2001**）が、もちろん今回の映画化にあたっては、これを参照しつつ、コルタイが脚本を用意した。小説の概要はすでに『ドナウ通信』（二〇〇三年新春号）で紹介したので、ここでは繰り返さない（評者のサイト **http://morita.tateyama.hu** から PDF 版をダウンロードできる。映画はハンガリー語だが、ストーリーは小説を踏襲しているので、評者の概要に目を通されれば、ハンガリー語が分からなくても映画の鑑賞可能）。

Sorstalanság をどう日本語に訳すか。小説の日本語版（岩崎悦子訳）に使われた「運命ではなく」という訳語は内容を現す訳として適切だが、名詞の訳語としては何かすっきりしない。筆者が使った「運命の不在」というのも、大袈裟すぎて、適切ではない。訳語を選ぶ時には、小説全体に流れる主題やモチーフを勘案するのだが、私小説的な ***Sorstalanság*** の主題やモチーフは明瞭とは言い難い。それが訳語の選択を難しくしている。

この小説は作者の少年時代の体験をそのまま私小説的に展開したものだから、一人の少年のナイーヴな感覚がそのまま表現されている。だから、明瞭な思想や考え方が展開されている訳ではなく、体験を淡々と語ることで小説が構成されている。とくにドラマ性がある訳ではないので、映像化する際には、テーマの表現の仕方や、見せ場をどこにおくのかが難しい。

文学と映像

原作があるとはいえ、小説と映画は別の芸術作品だと割り切る必要がある。原作がある多くの映画作品では、原作にないストーリーや場面を駆使してドラマ性を高め、映画作品として仕上げる方法が採られる。

Sorstalanság の映画化では、ストーリーそのものは原作に忠実だが、全編を通して、アウシュヴィッツ性（ユダヤ人の悲惨さ、ナチスドイツの残虐さ）を強調することに終始している。これは映画化において付加されたものだ。しかし、この点は原作をどう解釈するかという小説理解にかかわる重要なポイントである。その解釈の是非が、映画化の成否を左右していると言ってもよい。筆者が気づいた限り、小説と著しく異なる設定がなされ、アウシュヴィッツ性が強調されている場面は以下の通りである。

主人公の少年がブダペストの収容所に集められてから労働キャンプへ出発する場面。この場面はユダヤ人の一時収容所としてかなり詳しく描写される。しかし、原作には、この場面の詳細な記述はない。原作では一時収容所から労働キャンプへの出発は淡々と描かれており、収容されてから出発まで、時間的に間もない（数日の）設定になっている。ところが、映画では数週間（数ヶ月？）も、雨風の当たる吹きさらしの場所に、市内の各所から集められた多数のユダヤ人が閉じこめられたことになっている。原作を読んでいる者が、最初にとまどう場面だ。

この場面の時間的経過は、これに続く場面にそのまま引き継がれる。ブダペストからアウシュヴィッツへの移動の場面では、貨車に雪が吹き込み、凍えながら移動する設定になっている。原作では真夏だが、映画では晩秋に変わっている。労働キャンプへの移動の悲惨さを描こうとしたのだろうが、小説と異なる設定に違和感を覚えるところだ。

原作では、最初に到着したアウシュヴィッツで、主人公を含めた少年達の収容所を観察した様子が叙述されているが、この部分の映像はない。ブッフェンヴァルドの労働キャンプに到着してから、映画は褐色のフィルターがかかった白黒映画に変わる。もちろん、労働キャンプの暗さを強調するための手法である。殺風景で、常に天候が悪く、雨降りが続く。小説では、労働キャンプの周辺は、アウシュヴィッツとは異なる緑豊かな森林地帯として描かれている。

小説ではキャンプにおける物々交換の様子が少年の興味深い体験として描かれている。他方、映画では生存をかけた喧噪になっている。

小説で描かれていたキャンプ内病棟の看護士や医師の観察などは省かれている。主人公の少年が関心をもったキャンプ内での収容者の専門分業や人間的な触れ合いは、ほとんどカットされている。

アウシュヴィッツ化に堕したか

Sorstalanság のノーベル賞受賞は、ナチの残虐性を告発するアウシュヴィッツ文学ではないからだろう。今

更アウシュヴィッツ文学でもあるまい。アウシュヴィッツ文学なら、すでに優れた作品が多数出版され、映画化されている。

一人の少年が、何の変哲もない日常生活から一瞬のうちに非日常的な世界へ引っ張り込まれる。しかし、その非日常的な世界に、主人公が別の日常的な生活を見いだすところに、他のアウシュヴィッツ文学とは違う ***Sorstalanság*** のテーマがあったはずである。ユダヤ人の運命を嘆くのではなく、労働キャンプでの人と人の繋がりや生活を淡々と描き、そこにも人が生きる日常的な世界があることを描いた。「運命ではなく」という表題が付けられた所以だろう。だから、このテーマを活かす映画を製作するとすれば、労働キャンプのアウシュヴィッツ性を強調するのではなく、主人公の観察や体験、それから各種の人間関係を精緻に描く必要があった。

しかし、コルタイはこの視点を排し、労働キャンプの悲惨さを描くことに単純化したために、原作の主題を失ってしまった。そうなれば、ただのアウシュヴィッツ映画になってしまう。

出来上がったばかりの映画をベルリン映画祭に押し込んだが、評判はイマイチだった。並のアウシュヴィッツ映画になってしまっては、審査員や観客に訴えるものがない。

優れた小説か

これまで述べた理由から、評者は、***Sorstalanság*** の映画化は成功していないと考える。他方、それはコルタイの原作理解の問題だけとは言い切れない。ケルティースの小説そのものが、テーマを十分に描き切った優れた文学作品なのだろうか。

ケルティースの小説が面白いかと聞かれて「面白い」と答えるハンガリー人は少ないだろう。読み易いかと聞かれたら、「読みにくい」と答える人の方が多いだろう。文章がうまいと思うかと聞かれたら、ほとんどの人は首を横に振るだろう。物書きとしての歯切れや構成が良いとはとても言えない。ノーベル賞をもらったから優れた小説、小説家だとは言えない。受賞には運とか政治的な関係とか、諸々の条件が働いている

テーマが不明瞭でドラマ性に欠ける原作の映画化には、ストーリーを盛り上げる設定が必要になる。ところが、アウシュヴィッツ的悲惨さを強調すればするほど、原作のテーマから外れ、ただのアウシュヴィッツ映画に堕してしまうのである。

それにしても思うこと

今年はアウシュヴィッツ解放六〇年、日本の戦後六〇年。戦後これだけの時間を経ても、ナチスドイツの犯した罪の告発は、これでもかと思わせるほど、後を絶たない。二〇〇

三年のアカデミー賞受賞作「ピアニスト」も、ワルシャワの対ナチ蜂起を題材にしたものだった。こういう映画が国際的な賞賛を浴びる度に、ドイツ人はどのような感情を抱くのだろうか。これでもかと、ナチの残虐行為を見せられて、ドイツ人は何を感じ、何を思うのだろうか。過去の愚行を恥じ、歴史がドイツ人を赦していないことを肌で感じ、贖罪を乞うのだろうか。多数の人命を奪った償いは、六〇年程度の時間では済まないのか。というより、ナチスドイツの犯した過ちを人類の愚行として記憶し、常に警鐘を鳴らし続けることでしか、人類には再犯を防ぐ手だてがないということではないか。

ところで、日本はどうだろう。日本人は皆、大日本帝国時代の蛮行を忘れ去った。ドイツと違って、日本の蛮行が映画になって日本で上映されることはない。日本の若者の多くは、日本が朝鮮や中国の抑圧者だったことなど知らない。逆に、日本のアジア支配を過ちとして殊更に強調するのは自虐史観だと騒ぎ立てている人たちがいる。しかし、今の学校ではその「自虐史観」の歴史すら教えていない。古墳時代に時間をとっても、現代史を詳しく教えていない。だから、日本の子供たちは、日本人が原爆の被害者だと知っていても、残虐行為を行った侵略者だったなどとは思いもよらない。まして、北朝鮮の拉致問題がある現在、「日本人は被害者」という意識しかない。日本人が健忘症に陥っても、被害者はそう簡単に忘れるわけにはいかない。中国や韓国が日本人の歴史認識に苛立つのは、当然だろう。

八月一五日に靖国神社に集合する人々は、まさに軍国の母を懐かしみ、大日本帝国の軍服を着て英霊を称えている。そういうアナクロの宴の象徴になっている神社詣でに一国の首相が固執し、「皆で靖国を参拝する会」などの烏合の衆が政治を取り仕切っている。そういう輩が天皇を元首と規定する憲法改正を急いでいる。時代錯誤も甚だしい。教育委員会が学校行事での国歌斉唱・国旗掲揚を監視するというのも、文明国では珍しい日本ならではの強制管理だ。愛知万博の弁当検査も異常なら、持ち込み弁当が首相の一言で許可されるというも異常だ。それを異常だと思わない日本人が怖い。お上の通達を愚直に守る行動は、北朝鮮の独裁制にも共通するアジア的専制政治を支える行動規範だ。国連安保常任理事国になる資格がないと批判されて、返す言葉があるだろうか。歴史を反省することなく、カネで地位を買おうとする経済アニマルだと見られても、反論の仕様がない。

ドイツと日本。この違いはどう説明されるのだろうか。少なくとも国際的な場で仕事をする日本人は、このことを良く考えておくべきだろう。

【事務局便り】

長かった冬もやっと終わり、春満開、外出が嬉しい季節となりました。会員の皆様にはご健勝にお過ごしのことと存じます。

ソフトボール大会を初め、今年も日本人会の行事にて楽しい時間を過ごして頂ける様、担当理事各位と共に事務局一同、皆様のご参加をお待ち申し上げております。

上半期の行事予定は次の通りです。

五月八日（日）九時から
　第一回ソフトボール大会
六月一八、一九日（土、日）
　巡回健康相談

過日、会員の皆様にお願い致しました本年度年会費をお支払い頂き、ありがとうございました。まだ、ご送金いただいていない方は、早急にお手続きを頂けます様、お願い申し上げます。また、お知り合いの在留邦人で、当会に未入会の方がいらっしゃいましたら、入会は随時、大歓迎です。事務局までご連絡頂けましたら、すぐに入会申請書をお送り致します。なお、年会費は家族会員6,000Ft.　単身会員 4,000Ft　学生会員 2,000Ft　及び入会初年度は各々右半額が入会金として加算されます。

下半期は運動会、第２回ソフトボール大会、年末総会及び懇親会を予定しています。年に数回ではありますが、在留邦人相互の交流を通し、ハンガリー生活が益々楽しいものになる事と信じております。また、本年四月の日本人学校の開校により、新たに当地に来られた方や、学校が変わり少し寂しくなってしまった児童生徒、保護者の皆様にも、当会行事を通し【友達の和】を広げていただければ幸いです。

巻末の当会連絡先をご参照頂き、ご意見ご希望など、お気軽に事務局までご連絡下さい。

（事務局　酒井）

＊『巡回健康相談』は日本の［財団法人　海外邦人医療基金］より派遣される医師団が当地を訪問、日ごろの健康に関する相談を日本語にて受け付けるものです。日本大使館の協力の元、日本人会が窓口となり、年一回実施されています。参加は無料、当地在留邦人全ての方が対象です。